

## 「助け合いという名の投資」

福岡教育大学附属福岡中学校  
安楽 達斗

先月、風邪をひいてしまった。

風邪をひくと、母親に保険証と医療証、おくすり手帳、そして五百円玉を持たされて、病院に行くことになる。病院では、診察の後、五百円を払って「おだいじに」と言われ、帰ってくる。いつも、必ずそうだ。

だが、先月の僕はなぜか、五百円を払った後にふと、もらった医療費の領収書を眺めた。そこには、再診料や検査代、薬代などが書いてあったが、その合計金額には、五百円よりも大きな金額が記されていた。一瞬戸惑ったが、すぐに理解した。福岡市の「子ども医療費助成制度」のおかげで、高校生以下の医療費は月額五百円までとなり、それ以上は市が負担してくれているのだ。市が負担、とはいえども、市の主な財源は税金であるはずだ。私たちは普段から、税金の恩恵を受けているのである。そのことを今回、風邪をひいたおかげで、改めて身にしみて実感した。

僕は、税金との関わり方には、二つあることに気づいた。まず、今の僕たちのように、「誰かが払った税金に助けられる」という関わり方。そして、大人たちのように、「税金を払って誰かを助ける」という関わり方だ。子ども時代には私たちはたくさんの税金に助けられる。だからこそ、大人になったら自分が税金を払って、誰かを助ける。大人のとときに税金で多くの人を助けたので、さらに年を取ると今度は年間で自分が助けられる側になる。これは、非常に理にかなっており、素晴らしいシステムだと感じた。

現在、大人たちの中には、税金が多いと不満を口にする人もいるが、その人たちは税金に助けられる時期があったことを忘れていないのではないだろうか。税金はいわば「助け合いという名の投資」である。子どもの頃に税金に助けられた経験があるからこそ、大人になれば子どものために税金を負担する。税金を通じて投資をするようなものだ。さらに年をとると、若い頃に税金で助けた子どもたちが、今度は自分たちを税金で助けてくれる。投資した利益を受け取る側になるわけである。社会で暮らしている全員が、投資のような形で税金を納めることによって、いろいろな場面で誰かを助けたり、誰かに助けられたりする。それが税金の意義というものであり、私たちは、そのことを常に意識して過ごす必要があるのだ。

私たちは生活の中で、互いに助け合って生活している。誰かを助けたなら、必ず、自分が助けられる時が来る。そのように、全員が全員と助け合うための仕組みが税金である。もし、税金が多い、とか、なぜ増税するのだ、などと思うことがあったとしても、一度立ち止まって考えてみてほしい。税金は助け合いという名の投資。今自分が納めれば、いつか必ず自分に返ってくるのだ——と。